

TOEIC D レベルの高専生に向けた Context-based Curriculum の開発

柴田 純子 (岐阜工業高等専門学校 外国語科)

井上 英俊 (岐阜工業高等専門学校 外国語科)

目次

要約	1
I) はじめに	2
1. 学校で TOEIC を教えるべきか	2
2. 新しい教材の必要性	2
3. 本論文の概要	3
II) 研究の背景	5
1. TOEIC 受験対策の授業における一般的な手法と問題点	5
1.1 過剰な新出言語素材	5
1.2 背景的知識の欠落	5
1.3 産出活動の欠如	6
2. Context-based curriculum の必要性	6
III) 研究の目的	7
IV) カリキュラム開発	8
1. 言語素材	8
2. 指導法	8
3. 指導案と教材の開発	10
V) 定量分析	12
1. 調査対象者	12
2. 教材	12
3. 手順	13
4. 結果と考察	13
VI) カリキュラムに対する学習者の意識に関する研究	16
1. 調査の目的	16
2. 調査対象者	16
3. 手順	16
4. 結果と考察	17
4.1 「最も効果的な学習方法」に対する学習者の考え	17
4.2 「TOEIC 形式の問題演習」に対する学習者の考え	19

VII) 終わりに	20
注記	22
参考文献	23
付録1. 教材見本：レッスン1、会話2（1 ページ）	24
付録2. 教材見本：レッスン1、会話2（2 ページ）	25
付録3. レッスン1の補助教材	26

要約

本研究の目的は二つある。一つは、リスニング、スピーキング、背景的知識の学習を通じて総合的な英語コミュニケーション能力の育成を図るための、高等学校卒業レベルの学習者用 context-based curriculum（「空港」「レストラン」といった場面別にレッスンを計画するカリキュラム）を開発することである。もう一つは、TOEIC リスニング・セクションを事前・事後テストとして使用し、このカリキュラムの TOEIC リスニング・スコアに対する効果を評価することである。そのため、カリキュラムを使用した学習者のリスニング・スコアを、一般的な TOEIC 受験対策書を使用した学習者のスコアと比較した。定量分析の結果、本研究において開発した 5 か月間のカリキュラムは、学習者に対して TOEIC 形式の問題に触れる機会をほとんど与えなかったにも関わらず、TOEIC のリスニング・スコア向上に対して、TOEIC 受験対策書と同程度の効果があることが明らかになった。指導後に実施した質問紙による調査では、学習者の大多数が TOEIC スコアの向上には TOEIC 形式の問題を解く必要があると考えていること、しかしながら TOEIC 問題演習に必要だと思われる学習時間については、context-based curriculum を使用して指導された学習者が必要と考える時間は、TOEIC 受験対策書を使用して指導された学習者よりも顕著に短いことが明らかになった。

1) はじめに

1. 学校で TOEIC を教えるべきか

グローバル化の時代にあって、英語コミュニケーション能力の重要性はますます重要になっている。大学や高等専門学校（以下「高専¹⁾」と略す）においては、国際コミュニケーション能力育成のための効果的な英語授業を提供することによって、こうした状況への適切な対応が求められている。世紀が改まって間もない頃から、株式会社日立製作所、トヨタ自動車株式会社、松下電器産業株式会社など複数の大手エンジニアリング企業は、従業員の英語運用能力を公式に評価する指標として TOEIC®テストを採用すること、ならびに一定の TOEIC スコアを昇進の必要条件とすることを発表した。その結果、会社従業員はもちろん、工学を学ぶ学生も TOEIC に大きな関心を示すようになった。2003 年 6 月に岐阜工業高等専門学校の第 5 学年（最終学年）在籍学生を対象に実施した調査では、学校側が TOEIC 受験に対して何らかの支援を提供することを望むと回答した学生が、全体の 81%を占めた。

TOEIC が教育関係者の注目を集めている背景には、もう一つ現実的な理由がある。少子化による入学者の減少を受けて、大学や高専は生存競争を繰り広げている。このような状況において、知名度の高い TOEIC という外部評価基準を用いて学生の平均スコアを示すことは、その教育機関が提供する英語教育の有効性をアピールする効果的な方法である。特に、TOEIC は、結果を「級」ではなく「スコア」で示すため、学生間や学校間の比較を容易にする。実際、現在多くの高専では、日本技術者教育認定機構（JABEE）による認定技術者教育プログラムの認定審査を受けているが、この審査においては、英語教育プログラムの有効性を示す客観的証拠として、学生の TOEIC スコアが公式に使用されている。

その一方で、学校教育への外部試験導入を問題視する教育者もいる。こうした教育者は、学校間の「TOEIC スコア競争」といった望ましくない風潮が生み出されることにより、本来それぞれの学校が独自に持つべき教育目標が外部組織の作ったそれに追従させられることを懸念している。また、学生が英語の言語習熟度そのものではなく、TOEIC スコアをより重視するようになることを危惧する教育者もいる。そして、多肢選択式のテストでは直接測定することができない技能、つまりスピーキングやライティングといった産出能力が軽視される可能性を主張している。

しかしながら、外部試験が学生に学習意欲を起こさせることも、すでに証明されている。第 3 学年在籍学生全員に TOEIC 受験を義務付けた岐阜工業高等専門学校における、TOEIC の導入について考察した研究（柴田、清水 2002）は、学生の英語学習に対する意欲にプラスの効果があったこと、平均独習時間が増加したことを報告している。

2. 新しい教材の必要性

適切な教材が無いことは、英語授業への TOEIC 導入を困難にしているもう一つの要因である。日本ではおびただしい数の TOEIC 受験対策書が出版されているが、そのほとんど

は TOEIC 形式のテスト問題を解いて受験に備えること目的として開発されたもので、TOEIC が取り上げる職場や日常生活で使用される英語を学ぶことを目的としたものではない。

高専や工業系の大学における英語授業時間数は学年進行に伴って減少することが一般的である。表 1 は、高専における 1 週間あたりの英語の授業時間の全国平均である。

表 1. 高専における 1 週間あたりの英語平均授業時間

(国立高等専門学校協会 2003, p.244)

学年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年
1 週間あたりの授業時間	4.2	3.8	2.8	1.6	1.0

※ 高専における 1 回の授業時間は 1.5 時間 (90 分) で、週 1 回の頻度で実施されるのが一般的である。

学生が就職準備に入る在学期間の後半、英語の平均授業回数は 1 週間あたり約 1 回である。したがって、前述の TOEIC 受験対策書を授業に導入することは、スピーキングやライティングといった、多肢選択式テストが直接扱うことのない他の様々な技能を練習するための授業時間を不足させる直接的な原因となる。これでは、「国際コミュニケーションをするために英語を学ぶ」という TOEIC 導入の目的とは反対の結果をもたらすことになりかねない。

このような状況に鑑みると、工学を学ぶ学生を担当する英語教員は、社会と学生の両方のニーズを満たす新しいカリキュラムおよびその教材の開発という、差し迫った必要性に直面していると言える。ここまでの議論をまとめると、その新しいカリキュラムは以下の 2 つの点を満たすべきである。

1. 国際化時代に社会がエンジニアに求める水準の英語コミュニケーション能力を養成するような、総合的な英語力を育成するものでなければならない。そして学生の就職上の必要性を、また各校の現実的な要求を満たすために、その英語コミュニケーション能力の向上は TOEIC スコアによって証明されるものでなければならない。
2. 英語を主専攻としない学生の限られた授業時間内に収まる、時間効率の良いカリキュラムでなければならない。

3. 本論文の概要

上述の目標を達成するため、本研究は高等学校卒業レベルの工学系学生を対象としたカリキュラムおよび教材を開発した。これらの学生のほとんどは、TOEIC の Proficiency Scale (TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表) の D レベルに属する。議論の範囲を明確にするために、本稿では学生のリスニング/スピーキング能力に焦点を当てカリキュラムを開発し、指導後に、TOEIC のリスニング・セクションのスコアによっ

てカリキュラムの効果を評価した。次にこの結果を、従来の TOEIC 受験対策書を使用して同時期に指導された学生のスコアと比較した。また、指導後に質問紙によるアンケートを実施し、カリキュラムに対する学生の意識を調査した。

II) 研究の背景

1. TOEIC 受験対策の授業における一般的な手法と問題点

多くの大学や語学学校が TOEIC 受験対策コースを提供しているが、それらの授業に使用される指導法について、包括的な研究は報告されていない。だが、書店に並んでいる TOEIC 受験対策書を見ると、(語彙の参考書を除けば) どの参考書も TOEIC 形式の問題を出題し、これに解答させるという手法を採用しており、これが最も一般的に採用されている手法であると考えられる。

本研究がまだ計画段階にあった 2000 年秋に、筆者らは TOEIC 受験者を対象とする英語の授業で使用するテキストを探していた。しかし、職場でのコミュニケーションのための英語を学びながら TOEIC 受験対策ができるテキストは 1 冊も見つからなかった。販売されていたのは、ビジネス特有の表現や専門用語を取り扱ったビジネス英語のテキスト、あるいは受験対策用の TOEIC 形式の問題集であった。日本におけるいわゆる「ビジネス英語」とは、オフィス業務において使用される実務英語を指すことから、エンジニア中心の高専の学生には適さないため、我々は TOEIC 形式の問題集²⁾の方をテキストに採用し 2 年の間授業を行った。その後、これらのテキストが高等学校卒業レベルの EFL 環境にある英語授業に適切な教材であるかどうかを 1)-2 節で論じたカリキュラム開発の 2 つの目標を踏まえて検討した。その結果、これらのテキストは以下の三つの面で不適切と思われた。

1.1 過剰な新出言語素材

TOEIC 問題集の目的は、新しい言語素材の導入ではなく、TOEIC リスニング・セクションの問題を聞いて解答する練習をすることにある。しかし、リスニング教材に新出単語が多すぎる場合、それはリスニングの練習として適切に機能しない。高等学校卒業レベルの日本人学習者は、文部科学省検定済教科書を使用して、一般教養としての英語を学習した者が一般的である。これらの教科書では、職場に関する話題はほとんど扱われていないし、日常会話に関する話題も一部にしか過ぎない。したがって、TOEIC を模した問題演習を授業に導入すると、知らない単語が多すぎて聞いている内容が理解できない、との苦情をよく耳にすることになる。

こうした学生を対象とするカリキュラムでは、職場や日常会話に焦点を当てた新しい言語素材の導入を重視し、TOEIC の問題演習をする前に、計画的な方法でこれらの言語素材を教授するべきである。

1.2 背景的知识の欠落

学生には普通の社会人が「常識」と考える知識が欠落していることがある。例えば、「checking account (当座預金、小切手勘定)」という単語を使った問題が出て来た際に、筆者は 3 年間にわたり通算 700 名の学生に次のように質問してきた。『日本で小切手を使う場合、どのような口座を開く必要がありますか。この口座を日本語で何と言いますか。』

しかし、「当座預金」という日本語を解答できた学生は一人もいなかった。このように学習者が学生の場合、日本語に訳しただけでは理解できない内容がある。日本人の学生には実務経験がほとんどないため、教材に語学上の説明を加えるだけではなく、製造、人事、財務³⁾といったビジネス関連の話題には、特に多くの背景的知識の説明を加えるべきである。

1.3 産出活動の欠如

第三に、TOEIC 受験対策書には、スピーキング能力の向上を目的とする産出活動 (Productive activity) が含まれていない。企業は学生の「英語コミュニケーション能力」を評価するために TOEIC を使用している。産出のための練習をすることなく TOEIC 受験技術の習得のみを目的として英語を勉強すれば、将来、職場において英語が必要になった際に問題が発生することは容易に想像できる。

2. Context-based Curriculum の必要性

TOEIC 形式の問題集は、内容ではなく問題形式や文法項目別に章立てされているのが普通である。⁴⁾ つまり、あるページに問題が 10 問印刷されていれば、10 の異なる話題や場面が提示されていることになる。その全てについて前述した三つの要素、すなわち新出言語素材の導入、背景的知識の説明、産出活動を補おうとすると、授業は時間ばかりを費やしまとまりのないものになってしまう。この問題を解決するには、コンテキスト (ここでは「空港」「レストラン」といった「場面」) によって章立てした新しいカリキュラムの開発が必要であると我々は考えた。コンテキストに基づいてカリキュラムを作ることで、新しい言語素材や背景的知識を系統立てて教えることができる。また、学習者は学習したばかりの知識を使って、スムーズにリスニングやスピーキングの練習へと移行ができる。特定のコンテキストが指定されれば、コミュニケーション活動の計画がより容易になるため、指導者にとっても利点がある。

特に、背景的知識の教授は、本カリキュラムの特に重要な要素である。背景的知識はスキーマと呼ばれることが多いが、スキーマが理解力の強化につながることは広く認められている。また、EFL 環境において、背景的知識が聴解力に大きな影響を及ぼすことを示唆する研究がいくつか報告されている。たとえば Long (1990) は、外国語としてスペイン語を学習している学生に、よく知っている話題 (ロック・グループ) とよく知らない話題 (ゴールド・ラッシュ) に関するスペイン語の一節を聞かせ、その後再生テスト (recall test) と内容把握問題のテストをした。その結果、話題に関するスキーマがある場合には、言語的知識よりも内容スキーマ (content schema) がより重要な役割を果たすことを示唆する結果を得た。また、Uematsu (1999) においても、スキーマの提供が、再生テストと内容把握の成績向上に寄与することが報告されている。

Ⅲ) 研究の目的

本研究は、次の問題に答えることを目的とする。

EFL 環境で学ぶ高等学校卒業レベルの学習者に対して、スピーキングの練習をはじめとする多様な活動を含んだ **context-based curriculum** に沿って、日常生活や職場で使用される英語を教授する。この方法により指導された学習者の TOEIC リスニング・スコアと、一般的な TOEIC 受験対策書を使用して TOEIC のパート別カリキュラムに沿って指導された学習者の TOEIC リスニング・スコアとの間には、どのような差が生じるのだろうか。

本報告書の目的は二つある。一つは、高等学校卒業レベルの学習者を対象に、D-2 で論じた目標の達成を目指した **context-based curriculum** を開発することである。もう一つは、TOEIC を事前・事後テストとして使用して、そのカリキュラムの TOEIC スコアに対する影響を評価することである。そのため、指導後のスコアの伸びを、TOEIC 受験対策書を使用するという一般的な指導法で指導された学習者のスコアの伸びと比較する。さらに、指導後、二つのカリキュラムに対する学習者の反応を比較、分析する。

IV) カリキュラム開発

1. 言語素材

本研究で開発したカリキュラムの効果を、一般的な TOEIC 受験対策書を使用した集団と TOEIC スコアを用いて比較するため、使用する言語素材は TOEIC で使用しているものに倣った。教材に使用したコンテキスト（場面）は、『TOEIC 公式ガイド&問題集』（The Chauncey Group International, 2000, p.14）の場面/状況のリストから選択した。まず、同リストの各項目を分類上のカテゴリー名として使用し、TOEIC 公式ガイド&問題集（The Chauncey Group International, 2000 and 2002）に記載されている TOEIC テスト問題を検討・類別した。次に各カテゴリーに分類されるテスト項目の出現頻度を集計した。このデータを参考に、1) 近い将来学習者がそのコンテキストに遭遇する可能性、2) TOEIC における出現頻度、3) 統制群が使用する TOEIC 受験対策書が取り上げた話題を考慮して、以下の7つのコンテキストを選択した。

- レストラン
- ショッピング
- 旅行（飛行機とバス）
- 電話での会話
- 会議
- 求職
- 様々なオフィス・ワーク

2. 指導法

前章の要旨を繰り返すと、この context-based curriculum には以下の要素が必要である。

- 日常生活や職場で一般的に使用される言語素材のインプット
- 日常生活や職場の状況に関する背景的知識のインプット
- リスニングの練習
- スピーキングの練習

これらの4つの要素を一つのカリキュラムに統合するために、私たちは Schank (1977) の「スクリプト(script)」の概念を用いた。「スクリプト」とは背景的知識の一種で、「特定のコンテキストに特有の一連の事象を説明する構造であり・・・スクリプトは日常生活の決まりきった状況に対処する」(Schank, 1997, p.41) ものである。例えば、ある人物が「レストランのスクリプト」を持っているとしよう。この場合、その人物は「ジョンは coq au vin (鶏肉の赤ワイン煮) を頼んで、カードで支払った。」という文の意味を理解できるだけでなく、「ジョンはおそらくその料理を食べたこと」、「(メニューから) そのレストラン

はおそらく高級なレストランであること」などを推測することができる。これは、レストランの SCRIPT が、文章内に明示されていない欠けている場面を補完する役割を果たすためである (Schank, 1997, p.40)。Schank は、言葉ではっきりと述べられていない情報の推測を可能にするこの認知機構を、script applier と呼んでいる。Schank によると、人は人生経験に基づいた多数の SCRIPT を持っている。誰かの発言を聞いているときに、script header と呼ばれるいくつかのキーワードを認識すると、適合する SCRIPT が活性化されて機能することで、言葉に現れていない情報の推測やより迅速な理解が可能になるという。

Schank は、SCRIPT が「全く初めて遭遇した状況には対応しない」ことを指摘している。人間は SCRIPT がなくても新しい状況を理解できるが、理解にはより時間がかかる (Schank, 1977, p.41)。したがって、SCRIPT が有効なのは、文章が日常の決まりきった状況を説明する場合だけである。注目すべきことは、TOEIC の問題が使用するコンテキストこそ、決まりきった日常や職場の場面であるということである。実際、次のような推論的判断を必要とするテスト項目がかなり含まれている。

女性：おはようございます。こちらはスタンダード・コンピュータ・サービスです。セールス、サービス、研究部門のどちらにおかけですか？

男性：実は、人事部のフォンさんをお願いしたいのですが。

女性：おつなぎしますので、少々お待ちください。

55. 女性の仕事は何ですか？

- (A) 電話交換手
- (B) コンピュータ技術者
- (C) 営業担当者
- (D) 人事監督者

(The Chauncey Group International, 2000, p.166)

受験者が「電話交換手の SCRIPT」を持っている場合、最初の一行が script header として働き、電話交換手 SCRIPT を活性化する。すると、最後のせりふを聞く頃には、この女性が電話交換手であることに確信を持つことができる。この場合、SCRIPT は受験者の理解を早めるだけでなく、言葉ではっきりと述べていない情報（女性の職業）を推測する上でも役立つと考えられる。

本研究では、学習者が学習した内容（カリキュラムの要素）を「SCRIPT」の形式で整理できるように各レッスンの設計に努めた。すなわち、単語の学習や短文の聞き取り練習といった細かな情報の羅列でなく、一連の小さな事象の連なりというフォーマットで学習することで、「夕食を注文する」、「航空会社のカウンターで搭乗手続きをする」といっ

た、日常や職場で頻繁に行う活動に取り組めるようにした。

教材には、レッスンごとに10から15行のせりふで構成される会話がモデル会話として提示されている。TOEIC形式の会話問題演習では、三行、もしくはそれ以下のせりふで一つの場面の断片だけを描写するが、本カリキュラムの教材では、たとえば、「レストランで夕食を注文する」という行為を最初から最後まで描写する長さの英文を提供した。また、会話には、コマ割りのイラスト（またはフローチャート）を添えた。イラストの各コマは、「ウェイターが注文は決まったか尋ねる」に始まり、「メイン・コースの注文を取る」、「肉の焼き具合を尋ねる」といった具合に「夕食を注文する」という行為に典型的な各段階を描写している。このイラスト教材はこの教材の主要ツールである。授業の冒頭では、録音したモデル会話を聞く前に、その話題について自分自身が知っている知識を呼び起こすことができるように、このツールを使って短時間の活動を行う。例えば、テーブルの近くでメモを手にしたウェイターなどのコマを指定して、そのせりふを想像させる。さらに、英文を印刷した教材を使用してモデル会話とさまざまな代替表現を説明し、反復練習させた後で、イラスト教材を再び使用して、イラストのコマに沿って自分自身で即興の会話練習をさせる。この練習は二人一組で行い、各イラストに関連して新しく学んだ表現を使用し、オリジナルの会話を作り出す。

スクリプトとは、暗記を要する固定したひとつの会話文ではなく、むしろ概念を一続きに並べたものである。そのため、一連のイラストは、一続きの概念を示す認知的な地図としての役割を果たすことができる。一連の出来事が視覚的に示されるため、学習者は学んだばかりの単語や表現をそれぞれのイラストに関連づけて覚えることができ、また、自発的な会話練習をするためのガイドとしても使用できる。特に、空港やオフィスでの会話など、学習者が遭遇したことのない場面における会話を指導する時、この手法は有用である。こうすることで、学習者は空港の搭乗手続きカウンターではどのようなことが起こるかを理解し、その様子を心の中で思い描くことができる。こうした練習は、リスニング・テストに備えるためだけでなく、学習者が将来のコミュニケーションに自信を持って望むために役立つであろう。

3. 指導案と教材の開発

付録1から付録3は、「レストランでの夕食」というトピックについての単元の1ユニット分の教材例である。レストランで典型的に聞かれる会話の、ウェイターが「何名様ですか？」と質問する所からデザートを注文するところまでをモデル会話として取り上げ、それを3分割してそれぞれ1ユニットとし、3ユニット分の授業の教材とした。つまり、学習者が場面を頭の中に思い描きやすいように、会話の断片ではなく、レストランでの一連の出来事全体を順を追って進行する会話を中心に教材を構成した。

1ユニット分の教材は、以下の四つのパートで構成される。

-モデル会話

-コマ割のイラスト教材

(授業によっては、フローチャート、受付用紙など、何らかの流れを表すチャートを使用した。)

-代替表現集「ワードバンク」

-補足教材

以下は、この教材を使用した基本的な指導案である。教授者は、活動を付け加えたり、除いたりして、それぞれのユニットの教材に合わせた指導案を作成する。

表 2. 1 ユニット分の授業の指導案

活動	内容	目標
1 ウォーミングアップ (5分)	ユニットの話題についてクラスで英語でディスカッション	話題となる場面に焦点をあて、既知の語彙を復習する
2 穴埋め問題 (5分)	学習者に文章を除いた一連のイラストを与える。英語で内容を考え、空欄に記入する	学習者の既存の言語知識と背景的知識を話題となる場面に結びつける
3 書き取り (15分)	教授者がサンプル会話を口述し、学習者が空欄に記入する	聞き取り練習(書き取り)をする
4 教授者による説明 (15分)	教授者は会話文のプリントを配布し、語彙、文法、外国の習慣を説明する	語彙、文法、外国の習慣を理解する
5 音読 (5分)	学習者はモデル会話を聞いて、復唱する	発音を練習する。会話を覚える
6 語彙の増強 1 (15分)	教授者が「ワードバンク」の語彙を導入し、学習者に各段階で違う表現を学ばせる	語彙を増やす
7 語彙の増強 2 (15分)	学習者が副教材を見る(例: レストランのメニュー、レストランの広告、図解辞典の食べ物の名前のセクション)	語彙を増やす 外国の習慣や文化への関心を抱かせる
8 会話の練習 (10分)	学習者をグループに分けて、一連のイラストに沿って会話を練習する	会話の練習をする。学習したことを自然に再生する
9 復習のための小テスト (5分、次回の授業で)	次回の授業の冒頭で、学習者は新しい言語素材を復習し、穴埋め問題形式の小テストを受ける	新しい言語素材を覚えたかどうかをチェックする

V) 定量分析

1. 調査対象者

本研究の調査対象者は、国立工業高等専門学校 の 4 つの異なるクラスに所属する学生であった。全員が第 3 学年に属しており、平均年齢は約 18 歳であった。調査対象者の教育経験に大きな差はなかった。本研究への参加に先立って、全員が TOEIC リスニング・セクション（事前テスト）を受験した。次に、各グループの平均スコアがほぼ同じになるように、4 クラスを二つのグループに分けた（2 クラスずつ）。一つのグループの学生（二つの違うクラスに属する）を実験群（以下「コンテキスト群」と略す）とし、本研究で開発したコンテキストに基づくカリキュラムを使用して教授が行われた。そして、もう一つのグループの学生（二つの違うクラスに属する）を統制群（以下「テスト対策群」と略す）とし、主要な TOEIC 受験対策書（Lougheed, 1989）を教科書に用い、TOEIC のパート別の問題形式に基づくカリキュラムに沿って教授が行われた。事前と事後に実施されたテストとともに受験した調査対象者は、コンテキスト群で 65 名、テスト対策群で 76 名であった。

本研究への参加に先立って（新年度の最初の 3 ヶ月間）、調査対象者全員が同じ英語の授業を受講し、TOEIC リーディング・セクション対策の学習をした。調査対象者全員が本研究への参加以前に授業内で TOEIC について説明を受けたり、TOEIC 形式の問題に解答した経験があり、この試験についての知識は有していた。

2. 教材

コンテキスト群は本研究で開発した教材を使用し、表 2 の指導案に沿って教授が行われた。テスト対策群は、大学や語学学校の TOEIC 受験対策クラスで使用されている、人気の高い TOEIC 受験対策書（Lougheed, 1989）を使用した。この対策書の各章は、TOEIC の各パート（パート I からパート VII）に備えることを目的としている。本研究においては、教科書の二つの章（パート II とパート III）と、巻末に収録されている TOEIC 模擬問題を使用して授業が行なわれた。対策書に使用されている英文は、TOEIC の設問と同様に 1 行から 3 行で構成されている。コンテキスト群が使用した教材と比較すると、日常生活や職場に関するトピックがより多かった。本研究では、両群とも自然な速度のアメリカ英語による聴覚教材を使用した。

テスト対策群の授業構成は以下のとおりである。

1. TOEIC リスニング・セクションを模した練習問題
2. テキストを使用したリスニングに関する練習問題（多肢選択式）と教授者による説明
3. テキストを使用した語彙学習と教授者による説明
4. 新しい単語や句を覚えたかどうかを確認するための復習小テスト（次回の授業で実施）

両群が使用する教材の印刷された英文の量は、90 分の授業あたり約 2 ページ（指示、

設問を含めて) となるよう制御した。

3. 手順

まず、本研究への参加に先立って、調査対象者全員が事前テストとして、TOEIC リスニング・セクションを受験した。次に、それぞれのカリキュラムに基づいて、同じ教授者(研究者の一人)が1週間あたり90分の授業を5ヶ月間行った(総授業時間は平均16回、合計授業時間数24時間)。最後に、調査対象者は、事後テストとしてTOEICのリスニング・セクションを受験した。したがって、事前テスト・事後テストとして、TOEICのリスニング・セクション(それぞれ100の設問で構成される)のフォームを二組使用した。

本研究の実施期間中、コンテキスト群の授業ではTOEIC形式の問題は一切取り扱わなかった。しかし、テスト形式に不慣れなことが結果に影響しないように、事前テストの実施に先立って(年度当初、事前テストの10週間前)、授業内の60分間を使って、両群にTOEICリスニング・セクションの4つのパートに解答する練習をさせた。さらに、事後テストの前にも、もう一度同じ練習を実施した(事後テスト前の最後の授業の60分間で実施)。

4. 結果と考察

本研究において使用された統計手法は、Taira (1993) と Taira and Oller (1994) において使用された統計分析の枠組みを踏襲した。すべての統計分析に対して StatView version 5.0 を使用した。

表 3. 記述統計

	人数	平均スコア	標準 偏差	最高 スコア	最低 スコア
	(<i>n</i>)	(<i>M</i>)	(<i>SD</i>)	(<i>MAX</i>)	(<i>MIN</i>)
コンテキスト群の事前テスト	76	171.8	38.8	270	90
テスト対策群の事前テスト	65	176.5	43.4	315	95
コンテキスト群の事後テスト	76	194.0	40.2	275	105
テスト対策群の事後テスト	65	184.3	38.7	275	100

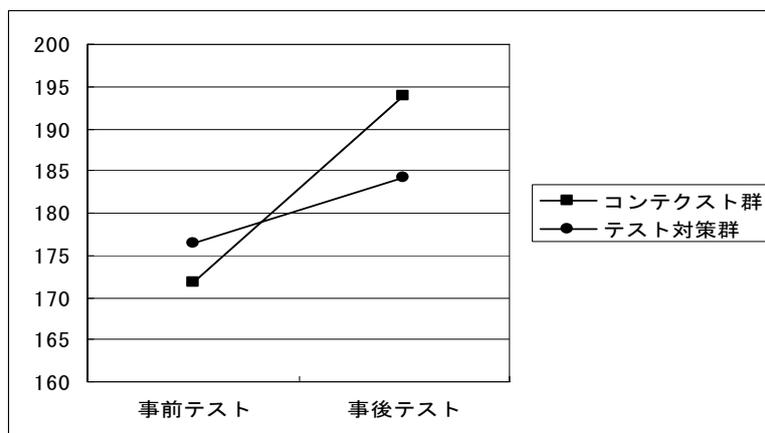


図1. 平均スコア

表3は、TOEIC リスニング・セクション（最高495点）の事前・事後スコアに関する記述統計である。事前テストでは、両群の間に有意な差は見られなかった ($t=0.678$, $p=0.499$)。しかし、事前テストでテスト対策群がより高い平均スコアを獲得したことから、教授開始時にはテスト対策群がやや有利であったと考えられる。

本研究の最大の関心は、この教授法に基づく指導が学習者に与える効果である。コンテキスト群とテスト対策群の比較に適した手法として共分散分析 (ANCOVA) を行った。この分析では、事前テストの結果を事後テストの共変量として取り扱う。群と事前テストの相互作用には、同じ傾きを持つとの前提に反する徴候は認められなかった ($F 1, 137 = 0.269$, $p = 0.605$)。したがって、どちらの指導法に対しても、事後テストの事前テストに対する回帰は同じであった。

主結果を表4に示す。

表4. 事後テストの結果に基づく共分散分析による両群の比較

	自由度 (df)	平方和 (SS)	平均平方 (MS)	統計量 (F)	有意確率 (p)
群	1	4578.185	4578.185	3.149	0.067
事前テスト	1	32229.599	32229.599	24.072	<0.000
残差	138	184765.234	1338.879		

この表から、コンテキスト群とテスト対策群の間には有意な差がないことがわかる ($F 1, 138 = 3.149$, $p = 0.067$)。この結果は、コンテキスト群が、TOEIC リスニング・セクションの問題への対策だけを学習したテスト対策群と同等の成績を収めたことを示している。

次に考慮すべき点は、事前テストと事後テストのスコアの差である。表5では、事前テストと事後テストを比較した。

表 5. 多変量分散分析による事前・事後テストの比較

	自由度 (<i>df</i>)	平方和 (<i>SS</i>)	平均平方 (<i>MS</i>)	統計量 (<i>F</i>)	有意確率 (<i>p</i>)
調査対象者間					
群	1	439.540	439.540	0.196	0.659
残差	139	312023.935	2244.777		
調査対象者内					
事前/事後テスト	1	15703.254	15703.254	15.759	<0.000
群*事前/事後テスト	1	3633.396	3633.396	3.646	0.058
残差	139	138509.157	996.469		

事前テストと事後テストを比較した結果、両者の間には有意な差が認められた ($F 1, 139 = 15.759, p < 0.000$) が、コンテキスト群とテスト対策群の間には有意な差はないことが確認された ($F 1, 139 = 0.196, p = 0.659$)。その一方で、群と事前/事後テストとの相互作用の有意確立を見ると、両者の間には有意な差がないとはいえ ($F 1, 139 = 3.646, p = 0.058$)、群とテストとの間の相互作用はある程度存在するのではないかと考えられる。つまり、教授前と比較して教授後は両群の TOEIC リスニングスコアは高くなったのであるが、事前テストにおいてテスト対策群のスコアがわずかにコンテキスト群を上回っていたことが、事後テストにおけるテスト対策群に対するコンテキスト群の優位を打ち消していると考えられる。さらに、この群と事前/事後テストとの間の相互作用は、コンテキスト群が教授開始時に英語力において優位に立っていたテスト対策群をしのぐ進歩を遂げた、という事実によるものではないかと考えられる。

これらの研究結果から、二つの結論を導くことができる。第一の結論は、TOEIC において D レベルにある日本人学習者は、5 ヶ月間という短い学習期間であっても TOEIC リスニングスコアを向上させることができる、ということである。つまり学生は、TOEIC が測定する英語習熟度の向上につながる能力を獲得したことを示唆している。第二の結論は、本研究において開発されたコンテキストに基づくカリキュラムは、5 ヶ月間の教授期間内に TOEIC リスニングスコアを伸長させるという点において、少なくとも TOEIC 受験対策書と同等に有用である、ということである。さらに、図 1 における両群の事前テストのスコアと事後テストのスコアの差の傾きを比較すると、より長期間に渡る教授では、コンテキスト群がテスト対策群よりも高いスコアを獲得する可能性が期待できる。

VI) カリキュラムに対する学習者の意識に関する研究

これまでの章においては、TOEIC 受験対策書の授業への導入によって予測されるいくつかの問題を議論した。また、定量分析の結果は、TOEIC リスニングスコアの向上という点において、今回のコンテキストに基づいた指導法が、TOEIC 受験対策書と同等の効果があることを示唆した。しかし、これらの議論には学習者からの視点が欠けている。つまり、学習者がより効果的と考える教授法や学習法は、より効果的であると考えることもできる。そこで、今回使用したカリキュラムや教材に対する学習者の意識や意見を理解するために、事後テストの後で質問紙によるアンケート調査を実施した。

1. 調査の目的

この調査の目的は、次の三つの問題に答えることにある。

問題 1：対象の学習者が「自分の TOEIC リスニングスコア」を向上させる上で、最も効果的と考える学習方法は何か？

問題 2：対象の学習者が「自分の英語のリスニング能力」を向上させる上で、最も効果的と考える学習方法は何か？ 質問 2 に対する回答は、質問 1 に対する回答と異なるか？

問題 3：対象の学習者は、TOEIC 形式の問題を練習する必要があると考えているか？ もし考えているなら、どの程度の量の練習が必要と考えているか？

2. 調査対象者

前章で実験群（コンテキスト群）または統制群（テスト対策群）として授業を受けた学生を対象に調査を実施した。調査対象者は、4つの異なるクラスに所属していた。コンテキスト群（69名）とテスト対策群（75名）から、合計 144 の有効回答を得た。

3. 手順

調査対象者が事後テストとして受験した TOEIC のテスト結果を受け取ってから 1～2 週間後の授業内で、アンケート用紙を配布した。この時点では、調査対象者は本研究に関する情報を与えられていなかった。

表 6 は、アンケートの質問項目と選択肢である。

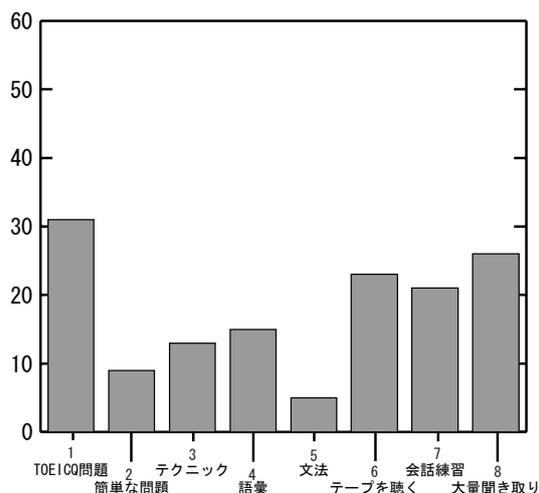
表 6. アンケートの質問

- Q1. あなたの現在の TOEIC リスニング・スコアを向上させるために、最も効果的な方法は次のどれだと思いますか？
1. 実際の問題と同水準の TOEIC リスニング模擬問題を練習する。
 2. 実際より簡単なリスニング問題を練習する。
 3. リスニングのテクニックについて書かれた参考書を読む。
 4. 繰り返し聞いたり書いたりすることで、重要な単語を覚える。
 5. 文法を基礎から復習する。
 6. 実践的な会話テープを繰り返し聴く。
 7. 実践的な会話表現を覚えて、会話を練習する。
 8. 楽しむために、または情報を得るために（映画、ニュースなどの）英語をたくさん聴く。
- Q2. TOEIC に関係なく、あなたのリスニング能力を向上させるために、最も効果的な方法は何かだと思いますか？（Q1 と同じ選択肢 1.~8.を与える）
- Q3. 90 分授業において、TOEIC 形式の問題演習に何分を費やすべきだと思いますか？

4. 結果と考察

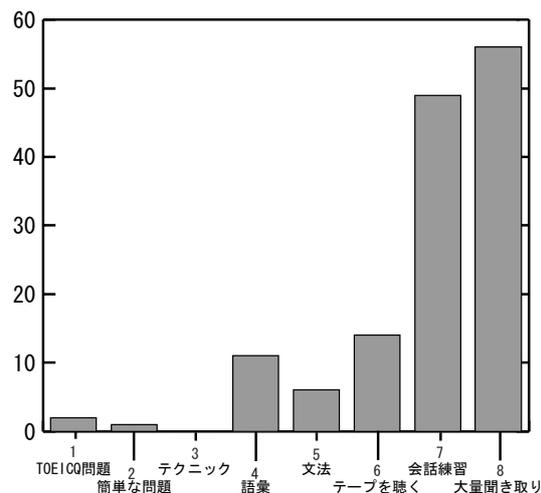
4.1 「最も効果的な学習方法」に対する学習者の考え

図 2 と図 3 は、自分にとって最も効果的な学習方法は何かという質問（項目 Q1 と Q2）に対する、調査対象者の回答の度数分布を選択肢別に示したものである。



Q1. 「自分の TOEIC リスニングスコア」を向上させるために最も効果的な学習方法

図 2. Q1 の度数分布表



Q2. 「自分のリスニング能力」を向上させるために最も効果的な学習方法

図 3. Q2 の度数分布表

二つの度数分布表を比較すると、最も回答の多い選択肢は両者の間で大きく異なっていることが明らかとなった。大半の調査対象者は、TOEIC リスニングスコアを向上するには（図 2 参照）TOEIC 形式の問題を解く学習方法が最も効果的と考える一方で、リスニング能力を向上するには、楽しみのため、または情報を得るためにたくさんの英語を聴くことが最も効果的とも考えていることが明らかになった（図 3 参照）。

Q1 と Q2 の回答をさらに分析すると、調査対象者は二つの集団に分けられる事がわかった。一つは Q1 と Q2 で違う選択肢を選んだ学生の集団（以下「Q1≠Q2 群」と呼ぶ）である。これらの調査対象者は、リスニング能力の向上のための学習と、TOEIC 受験のための学習は別だと考えている。もう一つの集団は Q1 と Q2 で同じ選択肢を選んだ学生の集団（以下「Q1=Q2 群」と呼ぶ）である。この群の学生は、リスニング能力向上のために学習すれば TOEIC リスニングスコアが向上する（もしくはその逆）と考えている。表 7 は、両群の学生の数と百分率を示す。

表 7. Q1≠Q2 群と Q1=Q2 群の度数分布

	全員		コンテキスト群		テスト対策群	
	度数	百分率	度数	百分率	度数	百分率
Q1≠Q2	100	71.94%	46	71.88%	54	72.00%
Q1=Q2	39	28.06%	18	28.13%	21	28.00%
計	139	100.00%	64	100.00%	75	100.00%

この表は、Q1 と Q2 で違う回答を選んだ調査対象者が多数派だったことを示している。これは、より多くの学生が、TOEIC 受験で特定のスコア水準を達成するには特別な受験対策が必要と考えていることを意味する。

他方で、Q1 と Q2 で同じ回答を選んだ調査対象者は約 30%であった。図 4 は、Q1=Q2 群の度数分布を選択肢別に示したものである。

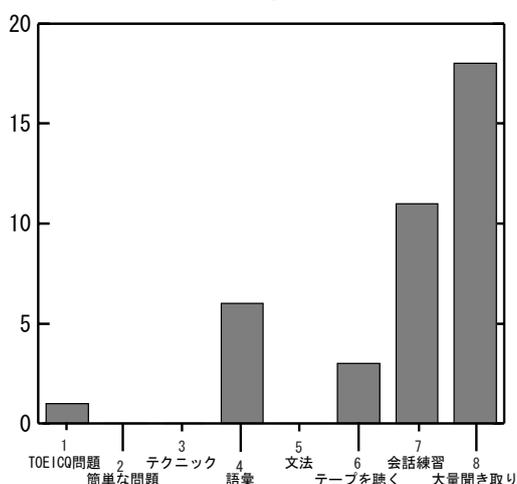


図 4. Q1=Q2 群の柱状グラフ

図4の度数分布は図3に似かよっていることがわかる。したがって、Q1=Q2群の学生は、リスニング能力の向上に重点的に取り組めばTOEICリスニングスコアも向上する、と考える傾向があるといえるのではないだろうか。逆の言い方をすれば、全てTOEICのテクニックである選択肢1、2、3を選択する学生がほとんどいないのは、これらの学生がTOEIC形式の問題を練習することにリスニング能力の向上には期待していないということになる。

Q1≠Q2群とQ1=Q2群の割合は、コンテキスト群とテスト対策群においてとほぼ同じであった。群分け(Q1=Q2群に属するかQ1≠Q2群に属するか)と事後テストにおけるTOEICリスニングスコア間の相関性を検定したが、有意な差は認められなかった($t = -0.889, p = 0.375$)。

4.2 「TOEIC 形式の問題演習」に対する学習者の考え

TOEIC形式の問題演習が必要と考える学生が多数派であるとするれば、授業時間のどれくらいを割くべきだと考えているのであろうか。本調査の第3の質問では、90分授業のうちどれだけの時間をTOEIC形式の問題演習にあてる必要があると考えるかを学生に尋ねた。以下は、コンテキスト群(図5)とテスト対策群(図6)の度数分布である。

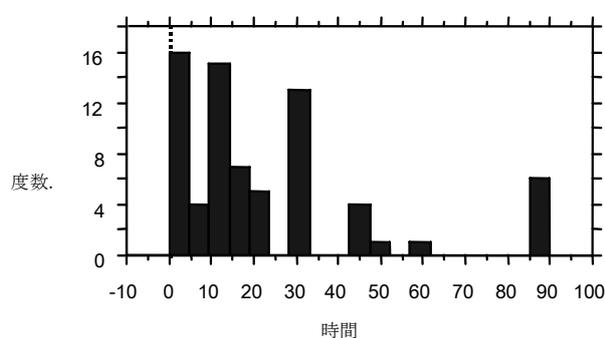


図5. コンテキスト群のヒストグラム

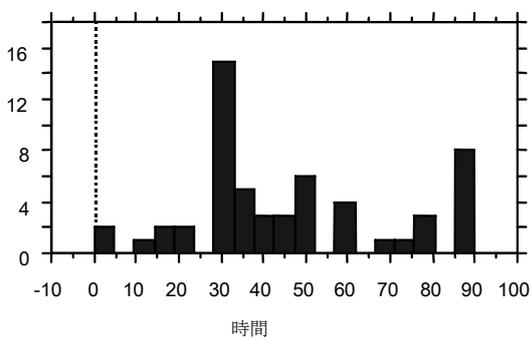


図6. テスト対策群のヒストグラム

前章において説明したように、コンテキスト群の調査対象者には本研究における指導期間中、TOEIC形式の問題演習をさせる指導は一切行わなかったが、本調査の結果、大方の学生が授業時間内にそうした学習をしたいと考えていたことが明らかになった。しかし、図5と図6の分布には大きな差が見られる。両群を比較すると、TOEIC形式の問題演習について、コンテキスト群はテスト対策群よりも短い時間で十分と考えていることがわかる。この差は、コンテキスト群への指導方法が、TOEICテクニックの学習をしたいという要望を減らすように機能したことを示している。特に、コンテキスト群72名のうち16名(23.1%)が、授業時間内にTOEIC形式の問題を練習するのはまったく必要ない、と回答したが、テスト対策群で同じ回答をしたのはわずか2名(2.6%)であった。

VII) 終わりに

調査対象者の意識に関する研究 (VI 章) の結果、「TOEIC リスニングスコアを向上させるには特別な対策が必要であり、英語能力自体を向上させるだけでは十分であるとはいえない」と考える学習者が大半を占めることが明らかになった。技術系の学生 (つまり、ある水準の TOEIC リスニングスコアが評価される分野で働くことになる学生) を対象とする英語授業を計画する際に、そのような考え方に同調すれば、授業において TOEIC 形式問題集を使用せざるを得ないことになるであろう。結果として、スピーキング (就職後に真に求められるであろうスキル) をはじめとする他のスキルを練習するための授業時間を圧迫することが予想される。しかし、このような考え方の一方で、定量分析の結果は、5 ヶ月間ほとんど TOEIC 形式の問題を練習させずに TOEIC リスニングスコアを向上させたという点において、この **context-based curriculum** には TOEIC 受験対策書と同等の効果があることを示唆している。そして事前テストと事後テストにおけるスコア差の傾きは、より長期間に渡り学習すれば、**context-based curriculum** に沿って学習した学生は、TOEIC 受験対策書を使用した学生よりも高いスコアを取得する可能性があることを示している。さらに、このカリキュラムは質問紙による調査の結果、学習者の TOEIC 問題演習に対する意識を変える役割も果たした。つまり、**context-based curriculum** に沿って学習した学生は、授業中に TOEIC 形式の問題に費やすべきだと考える時間がより少ないことが明らかになった。

よって、本研究の結果が示唆することは非常に明快である。英語コースのカリキュラムを設計する際には、学習者が話された英語を理解したり、英語を使用して表現したりする能力を促進することを授業の目標とすべきである。学習者が進歩すれば、TOEIC リスニングスコアは向上する。TOEIC 問題演習に刺激されてやる気が起きるのであれば、この種の問題演習は効果をあげることもあるであろう。しかしながら、授業時間の多くを費やすべきではない。90 分授業のうち、60 分以上を TOEIC 形式の問題に割きたいと答えた学生はほとんどいなかったためである。

こうした結論は予想どおりの結末ともいえるであろう。いうまでもなく TOEIC は、「英語コミュニケーション能力を測定する」ことを目的として開発されたのであり、多肢選択問題に答える技術の善し悪しを測定しているわけではない。TOEIC Technical Manual (ETS, 2002) は、いくつかの主要な会話能力テストと TOEIC のリスニング・セクションのスコアの間、高い相関性があることを示している。つまり、筆記試験である TOEIC が、受験者のスピーキング能力も測定できることを示唆している。本研究は、会話の訓練によって TOEIC リスニングスコアが向上するという点で、この主張を裏付ける結果となった。だが、TOEIC 受験テクニックを信奉する人々は、TOEIC リスニングスコアとスピーキング能力との間の相関関係をまったく考慮しないか、あるいはまったく信用していないために、コミュニケーションな英語学習を犠牲にしている。TOEIC スコアの妥当性については、外部の研究者によるさらなる研究が期待される研究分野であろう。TOEIC が他

者と英語でコミュニケーションを行う能力を正しく測定することを示す十分な証拠が得られなければ、さらに多くの人々が高スコアを取るための受験テクニックの習得に時間を費やすことになり、コミュニケーション能力を向上させるための学習の機会は失われてゆくだろう。本研究の結果が将来の国際社会で活躍する若いエンジニアの育成に向けた、効果的な英語教育カリキュラムの開発の一助となれば幸いである。

注記

1) 「“Kosen”（高専）」とは、「工業高等専門学校（College of Technology）」の略語である。国立高等専門学校 55 校、市立高等専門学校 5 校、そして私立高等専門学校 3 校が設置されている。中学校卒業生を受け入れ、電気・電子工学、機械工学、情報工学、土木工学、建築、商船といった分野で、5 年制の工学教育コースを提供している。

2) 1999 年に使用した教科書（文部省認定済高等学校外国語（英語）科用教科書と併用）は以下のものである。

・ 1998. 『TOEIC テスト 450 点攻略本』 東京：旺文社

2000 年、2001 年に使用した教科書は以下のものである。

・ Loughheed, L. 1996 *Preparation Series for TOEIC Test Introductory Course*, New York: Addison Wesley Longman

3) 『TOEIC 公式ガイド&問題集』（The Chauncey Group International, 2000, p.14）の場面／状況リストに基づいている。

4) このプロジェクトが開始された 2000 年当時に当てはまる。2004 年 3 月には、いくつかの出版社から話題・コンテキスト別にまとめられた TOEIC 受験対策書が出版されている。

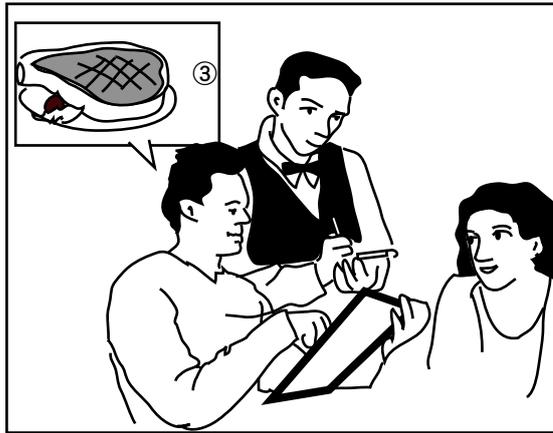
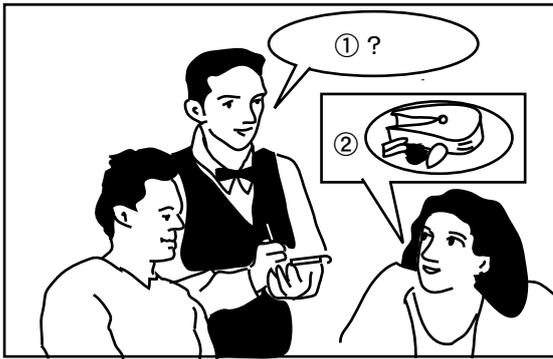
参考文献

- Brown, J. D. (1996). *Testing in Language Programs*. Upper Saddle River: Prentice Hall Regents.
- The Chauncey Group International. (2000). *TOEIC®公式ガイド&問題集*. 国際ビジネスコミュニケーション協会
- The Chauncey Group International. (2002). *TOEIC®公式ガイド&問題集 <Vol. 2>*. 国際ビジネスコミュニケーション協会
- Long, D. R. (1990). What You Don't Know Can't Help You: An Exploratory Study of Background Knowledge and Second Language Listening Comprehension. *Studies in Second Language Acquisition*, 24/1, 65-80.
- Lougheed, L. (1996). *Preparation Series for the TOEIC Test Introductory Course*. White Plains, NY: Addison Wesley Longman.
- Shank, R. (1977). *Scripts Plans Goals and Understanding*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers
- Taira, T. (1993). Episodes on the Computer. In Oller, J. W.(ed.), *Methods That Work: Ideas for Literacy and Teachers (2nd Ed.)* (pp. 309-319). Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Taira, T. & Oller, J. W. (1994). Cloze and Episodic Organization. In Oller, J. W. & Jonz, J. (eds.), *Cloze and Coherence* (pp. 345-369). London: Associated University Press.
- Uematsu, S. (1999). The Extent of Background Information and Comprehensive of Verbal Narratives. *Language Education & Technology*, 36, 63-75.
- 国立高等専門学校協会. (2003). 『コミュニケーション能力育成を主眼とした高専英語教育のありかた』. 平成 13・14 年度教育方法改善共同プロジェクト最終報告書.
- 柴田純子・清水晃. (2002). 「英語検定試験の導入と英語学習への動機付け」. 『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』, 21, 109-118.

CONVERSATION 2: Ordering a Meal

CD track 4

■ If you were one of the guests, what do you say to the waiter? Write your own answer, then listen to the model conversation on the CD.



CONVERSATION 2: Ordering a Meal

CD track 4



① Waiter: Are you ready to order?

WORDBANK

Have you decided?
Can I have your order?
May I take your order?
Would you like to order now?

② Guest 2: Yes, I'd like the king salmon, please.

WORDBANK

May I have the king salmon?
Could I order the prime rib?
Could I have the soup of the day?
I'll have the clam chowder.
I'll take the salad bar.



③ Guest 1: I'll have the medium-sized cut prime rib.



④ Waiter: How would you like your king salmon cooked?

⑤ Guest 2: Please make it **grilled**.

WORDBANK

fried
baked
steamed
sautéed



⑥ Waiter: And your prime rib?

⑦ Guest 1: **Medium-rare**, please.

WORDBANK

rare
medium-well
well-done



⑧ Waiter: OK. Would you like soup or salad with that?

⑨ Guest 2: What kind of soup do you have?

Waiter: We have Boston clam chowder or Minestrone.

Guest 2: I'll have the Minestrone.

⑩ Guest 1: I'd like to try the salad bar. Is it all-you-can-eat?

Waiter: Yes, it is.

MENU

<i>Appetizers</i>		<i>Entree</i>	
Shrimp cocktail	2.50	Prime rib (medium or large cut)	to be determined
Nachos	3.50	Top sirloin steak (medium or large cut)	to be determined
Chicken wings	4.50	Alaskan King Salmon fillet (prepared to your liking)	15.50
		Leg of lamb	15.50
		Barbequed ribs	15.50
<i>Soups and Salads</i>		Meatloaf	17.50
Chicken noodle soup	2.50	Spaghetti and meatballs	10.00
Soup of the day	2.00		
Caesar salad	3.00	<i>Desserts</i>	
Seafood salad	6.00	Chocolate mousse	4.50
Salad bar	4.50	Apple pie	3.50
		Blueberry cobbler	3.50
		New York style cheesecake	4.50

Copyright © 2005 The Institute for International Business Communication (IIBC). All rights reserved.

Educational Testing Service, ETS, the ETS logo, and TOEIC are registered trademarks of Educational Testing Service.

Educational Testing Service、ETS、ETSのロゴマーク、TOEICはEducational Testing Serviceの登録商標です。

日本語版発行日 2005年9月

日本語版発行 財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
(The Institute for International Business Communication; IIBC)
東京都千代田区永田町 2-14-2 〒100-0014
TEL 03-3581-5663 FAX 03-3581-9801

本資料の無断転載・複製を禁ず

この冊子は『A Development of a Context-based Curriculum for TOEIC Level D students of *Kosen* (National College of Technology)』を IIBC が邦訳したものです。